

KohanaLetter. 増刊

私が講演を拝聴した内田産婦人科医院の内田美智子先生が書いた、「いのちをいただく」という絵本のもとになったお話を紹介します。自分のお子さんにぜひ読み聞かせてあげてほしい、そんな願いを込めて今回ご紹介します。

坂本さんは、食肉加工センターに勤めています。牛を殺して、お肉にする仕事です。坂本さんはこの仕事がずっといやでした。牛を殺す人がいなければ、牛の肉はだれも食べられません。だから、大切な仕事だということは分かっています。でも、殺される牛と目が合うたびに、仕事がいやになるのです。「いつかやめよう、いつかやめよう」と思いながら仕事をしていました。

坂本さんの子どもは、小学3年生です。しのぶ君という男の子です。

ある日、小学校から授業参観のお知らせがありました。これまではしのぶ君のお母さんが行っていたのですが、その日は用事があったのでどうしても行けませんでした。そこで、坂本さんが授業参観に行くことになりました。いよいよ、参観日がやってきました。「しのぶはちゃんと手を挙げて発表できるだろうか？」坂本さんは、期待と少しの心配を抱きながら、小学校の門をくぐりました。授業参観は、社会科の「いろんな仕事」という授業でした。先生が子どもたち一人一人に「お父さん、お母さんの仕事を知っていますか？」「どんな仕事ですか？」と尋ねていました。しのぶ君の番になりました。

坂本さんはしのぶ君に、自分の仕事についてあまり話したことがありませんでした。何と答えるのだろうかと不安に思っていると、しのぶ君は、小さい声で言いました。「肉屋です。普通の肉屋です」坂本さんは「そうかぁ」とつぶやきました。坂本さんが家で新聞を読んでいると、しのぶ君が帰ってきました。

「お父さんが仕事ばせんと、みんなが肉を食べれんとやね」何で急にそんなことを言い出すのだろうかと坂本さんが不思議に思って聞き返すと、しのぶ君は学校の帰り際に、担任の先生に呼び止められてこう言われたというのです。

「坂本、何でお父さんの仕事を普通の肉屋って言うたとや？」

「だって、カッコわるかもん。一回見たことがあるけど、血がいっぱいいついてからカッコわるかもん…」

「坂本、おまえのお父さんが仕事をせんと、先生も、坂本も、校長先生も、会社の社長さんも肉を食べれんとぞ。すごい仕事ぞ」

しのぶ君はそこまで一気にしゃべり、最後に、「お父さんの仕事はすごかとやね！」と言いました。その言葉を聞いて、坂本さんはもう少し仕事を続けよう

かなと思いました。

ある日、一日の仕事を終えた坂本さんが事務所で休んでいると、一台のトラックが食肉加工センターの門をくぐってきました。

荷台には、明日、殺される予定の牛が積まれていました。坂本さんが「明日の牛やねえ…」と思って見ていると、助手席から十歳くらいの女の子が飛び降りてきました。そして、そのままトラックの荷台に上がっていきました。坂本さんは「危なかねえ…」と思って見ていましたが、しばらくたっても降りてこないの、心配になってトラックに近づいてみました。すると、女の子が牛に話しかけている声が聞こえてきました。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ…」

「みいちゃんが肉にならんとお正月が来ないって、じいちゃんの言わすけん、みいちゃんば売らんとみんなが暮らせんけん。ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ…」そう言いながら、一生懸命に牛のお腹をさすっていました。

坂本さんは「見なきゃよかった」と思いました。トラックの運転席から女の子のおじいちゃんが降りてきて、坂本さんに頭を下げました。「坂本さん、みいちゃんは、この子と一緒に育ちました。だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんと、この子にお年玉も、クリスマスプレゼントも買ってやれんとです。明日は、どうぞ、よろしく願います」

坂本さんは、「この仕事はやめよう。もうできん」と思いました。そして思いついたのが、明日の仕事を休むことでした。坂本さんは、家に帰り、みいちゃんと女の子のことをしのぶ君に話しました。「お父さんは、みいちゃんを殺すことは出来んから、明日は仕事を休もうと思っとる…」

そう言うと、しのぶ君は「ふ〜ん…」と言ってしばらく黙った後、テレビに目を移しました。その夜、いつものように坂本さんは、しのぶ君と一緒に風呂に入りました。しのぶ君は坂本さんの背中を流しながら言いました。「お父さん、やっぱりお父さんがしてあげた方がよかよ。心の無い人がしたら、牛が苦しむけん。お父さんがしてあげて」坂本さんは黙って聞いていましたが、それでも決心は変わりませんでした。

朝、坂本さんは、しのぶ君が小学校に出かけるのを待っていました。

「行ってくるけん！」元気な声と扉を開ける音がしました。その直後、玄関がまた開いて「お父さん、今日は行ってね！わかった？」としのぶ君が叫んでいます。坂本さんは思わず、「おう、わかった」と答えてしまいました。

その声を聞くとしのぶ君は「行ってきまーす！」と走って学校に向かいました。
「あ～あ、子どもと約束したけん、行かなねえ」とお母さん。坂本さんは、渋い顔をしながら、仕事へと出かけました。

会社に着いても気が重くてしかたがありませんでした。少し早く着いたのでみいちゃんをそっと見に行きました。牛舎に入ると、みいちゃんは、他の牛がするように角を下げて、坂本さんを威嚇するようなポーズをとりました。坂本さんは迷いましたが、そっと手を出すと、最初は威嚇していたみいちゃんも、しだいに坂本さんの手をくんと嗅ぐようになりました。

坂本さんが、「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんと、みんなが困るけん。ごめんよう…」と言うと、みいちゃんは、坂本さんに首をこすり付けてきました。それから、坂本さんは、女の子がしていたようにお腹をさすりながら、「みいちゃん、じっとしとけよ。動いたら急所をはずすけん、そしたら余計苦しかけん、じっとしとけよ。じっとしとけよ」と言い聞かせました。

牛を殺し解体する、その時が来ました。坂本さんが、「じっとしとけよ、みいちゃん、じっとしとけよ」と言う時、みいちゃんは、ちょっと動きませんでした。その時、みいちゃんの大きな目から涙がこぼれ落ちてきました。

坂本さんは、牛が泣くのを初めて見ました。そして、坂本さんが、ピストルのような道具を頭に当てると、みいちゃんは崩れるように倒れ、少しも動くことはありませんでした。普通は、牛が何かを察して頭を振るので、急所から少しずれることがよくあり、倒れた後に大暴れするそうです。次の日、おじいちゃんが食肉加工センターにやって来て、坂本さんにしみじみとこう言いました。「坂本さんありがとうございました。昨日、あの肉は少しもらって帰って、みんなで食べました。孫は泣いて食べませんでした。『みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるぞ。食べてやれ。みいちゃんにありがとうと言うて食べてやらな、みいちゃんがかawaiiそうかろ？食べてやれ。』って言うたら、孫は泣きながら、『みいちゃんいただきます。おいしかあ、おいしかあ。』て言うて食べました。ありがとうございました」

坂本さんは、もう少しこの仕事を続けようと思いました。

=====本の紹介後=====

ある学校で、保護者の一人から、「給食費を払っているのに、『いただきます』と子どもに言わせるのはおかしい」というクレームがあった、との話を聞いたことがあります。「なんという常識のない保護者なんだ！」と片付けるのは簡単です。でも、もしもこの保護者が、この話を知っていたとしたら、どうだった

でしょう？現在の食生活は、「命をいただく」というイメージからずいぶん遠くなってきています。そしてその結果、食べ物が粗末に扱われて、日本での一年間の食べ残し食品は、発展途上国での、何と 3,300 万人分の年間食料に相当するといえます。私たちは奪われた命の意味も考えずに、毎日肉を食べています。動物は、みんな自分の食べ物を自分で獲って生きているのに、人間だけが、自分で直接手を汚すこともなく、坂本さんのような方々の思いも知らないまま、肉を食べています。動物だろうが植物だろうが、どんな生き物であっても、自分の命の限り精いっぱい生き続けたい、そう願って生きているんだと私は思います。命をいただくことに対しての「思い」。お肉を食べて「あ〜、美味しい。ありがとう」お野菜を食べて「あ〜、美味しい。ありがとう」そこに生まれる思いはどんな思いでしょう？お肉を食べて「うえ〜、マズッ！」お野菜を食べて「うえ〜、マズッ！」そこに生まれる思いはどんな思いでしょう？食べ物をいただくとき、そこに尊い命があったことを忘れずに、その命を敬い、感謝の言葉をかけてあげられる人に育ちましょう。今日もまた、食べられることへの感謝の言葉、「ありがとうございます。感謝します。いただきます」食べているときの「美味しい！」という言葉。そして食べ終わった後の、「あ〜、美味しかった。ありがとうございます。ご馳走さまでした」という「食べられたこと」への感謝の言葉をかけてあげましょう。もちろん、食べ残しをせずに。

食べ物が、あなたの体を作ります。あなたの体に姿を変えて、あなたの中で生き続けます。そして、体の中からあなたを精いっぱい応援してくれています。あなたができる最高の恩返しは、たくさんの生き物たちから命のバトンを託されたあなたの命を、いっばいに輝かせること。喜びに満ちた人生を過ごすこと。それが、あなたと共に生きているたくさんの命たちが、いちばん喜ぶことなんです。みんなの分まで、命いっばいに輝きましょう。これが、私がプロとして、目の前にいる子どもたちやその保護者に伝え続けていきたいメッセージです。

=====

いかがでしたか？

以前子どもたちに「どうしてお昼やおやつの時にいただきますって言うかわかる？」とそれとなく聞いたことがありました。「言わないとお行儀が悪いから・・・」とか「ごあいさつだから」と子どもらしいコメントがあった反面、「お肉とかお魚は生きていたのに、食べるために死んじゃったから・・・」と応えた子どももいました。すべての意見に共感しながらその場を進めましたが、少しずつ確実に食の持つ意味を継続して教えていきたいと考えています。